

# みんなくりポジトリ

国立民族学博物館 学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

## HRAFとの協力体制はじまる

|       |   |
|-------|---|
| メタデータ | 言語: Japanese<br>出版者: 国立民族学博物館, National Museum of Ethnology<br>公開日: 2010-02-16<br>キーワード:<br>作成者: 祖父江, 孝男<br>メールアドレス:<br>所属: |
| URL   | <a href="https://doi.org/10.15021/00004669">https://doi.org/10.15021/00004669</a>   |

## HRAFとの協力体制はじまる

祖父江孝男\*

国立民族学博物館の招請により、国際交流基金の援助を得て1975年11月17日に来日した「人間関係地域ファイル」(Human Relations Area Files—略称HRAF, 通常“フラーフ”とよんでいる)の副会長ラガセ博士(Robert O. Lagacé)と同じくアジア研究部長のコー博士(Hesung C. Koh)の両氏は11月29日までの間、計5日間にわたって国立民族学博物館研究部メンバーとの間に会議を持ち、いろいろと協議を行なった。ここに国際交流基金の御厚意に対しても厚くお礼申し上げておきたいと思う。

この点について説明しておく、このHRAFは人類学分野の専門家の間ではすでによく知られた重要な組織であって、米国エール大学に本部をおき、世界の諸民族の社会・文化についての文献資料を整理し、独自の検索システムを用いた資料集(カードとマイクロ・フィッシュ)を編集し、世界の大学や研究所に提供している国際的な研究機関である。従来、わが国では京都大学がこのHRAF

への加盟会員としてカードの供給を受けていたのであるが、国立民族学博物館もまた近い将来、会員となり、その膨大なカードの全セットを受けとることになっている。

こうしたことに加えてもうひとつ更に重要なことは、HRAFと国立民族学博物館の間に共同プロジェクトの計画が昨年より進められてきたことである。先にも触れたように、このHRAFは世界の諸民族の社会・文化についての資料を整理供給しているのであるが、種々の事情によって日本関係のデータは極めて乏しく不十分であった。日本に対する関心が世界的にも非常にたかまりつつあるとき、この現状はそのままにしておくことができないということで、東アジア研究部長のコー博士が日本に関するデータを日本の学者の側から供給してほしいという提案をしてきたのが昨1974年のことであった。因みにコー博士は韓国系の女流社会学者で漢字で書けば高恵星。ポストン大学で博士号をとり、情報検索システムについての多くの著作がある。なおラガセ博士はフレンチ・カナダ系の人類学者。シカゴ大学で博士号をとり、アフリカを専攻している。

実は昨74年に日本関係のデータを充実させるという案がコー博士らによっておこされ、折しも“情報センター”としての機能を前面に打ち出している国立民族学博物館へ“打診”という形で意向がもたらされたのは74年初夏のこと、国際交流基金の援助で来日したカリフォルニア大学のデボス教授(George DeVos)

\* 国立民族学博物館第1研究部

を通じてであった。同教授は日本研究を専門とする人類学者であるが、ここで梅棹忠夫館長らとの間に具体的に話が進められることとなった。

このときの話し合いにもとづいて、1974年10月にはエール大学のHRAF本部において米国の日本研究者ら10余名が集まり、まる1日を費しての会議が開かれ、当時たまたま滞米中の梅棹館長と私とが出席してさまざまに意見を交換し、その結果、75年における国立民族学博物館での会議の実施その他が決められたのである。

こうして11月、5日間にわたる会議が行われたのであるが、ここで決められたことの大略を示すと次のとおりである。

HRAFと国立民族学博物館との協力によって作る予定の日本関係データの大系を「日本文化関係情報システム」(Japanese Cultural Information System—略称JACIS)とよび、これに関する共同プロジェクト(joint project)のHRAF側におけるdirectorをコー博士とし、国立民族学博物館側としては従来のいきさつから私がdirectorということになった。国立民族学博物館側としては現在、開館を控えてのさまざまな準備に文字通り忙殺されているため、本格的にプロジェクト作業を開始するのは開館後の1978年とし、それ迄は準備期間とする。すなわち78年以後、3カ年計画で然るべき財源を求めてこれをプロジェクトにむけ、でき得る限り全国的で学際的な委員会を作ってこれが資料の選択その他の任にあたる。

日本関係の資料というとき、現在のところ次の3つが考えられている。(1)日

本全体にわたる総論的資料(General Japan)・統計資料、地図、全般的な地理、歴史、社会・文化の概観に関するもの、(2)京都市に関する資料、(3)岡山県に関する資料。

上のうちの(2)と(3)については疑問もたれるかもしれないが、HRAF側の意見として、いわゆるcomplex cultureを考えるときには少なくとも1000年のtime depthを考慮に入れねばならぬという方針をとり、そのための都市の資料としては京都が最も適切ということになったのである。また岡山県は米国のミシガン大学が1950年代以降、組織的に調査を行っているので、米国側の既刊未刊のデータとしては岡山県のものが最も量が多い。そのためこれに対応させて、日本側としてもひとまず岡山から始めることにしたものである。もとより岡山は西南型農村地帯の典型であり、将来においてはこれへの補促として東北地方あるいはその他の資料をも考慮することが必要となるであろう。

とにかく、こうした資料のなかから重要な文献のピブリオグラフィーを作る。そしてそのなかから更に「必読」の部分をえらび出して(本や論文のなかからその全体をとる場合も、部分をとる場合もある)これを英訳してテキストを作る。このテキストの目的は、これから専門的に日本を勉強しようというひと、特に日本を専門とするわけではなく、世界を比較文化の立場から概観するにあたって、日本のことについても知りたいというひと。そしてまた小中高校の教師諸先生がた。……こうした人びとが日本について学ぶためのリーディングスとしての役割

を果す点にある。

なお実際には翻訳を技術的にどう進めるのが最もよいか？ ローマ字化はどうするか？ 等々の問題、資金の問題などがいろいろと未解決のまま横たわっている。なお上述の如く、本格的作業は1978年に開始される予定であるが、それ迄の準備期間には、HRAFで使っているシステムを用いて国立民族学博物館内の文

献、フィルム、テープ、レコード、民具類の整理分類、情報検索のシステムを作りあげていく。これを共同プロジェクトのはじめの部分として考え、できるだけ早く着手していく予定である。またこうした検索システムを作りあげていくために、国立民族学博物館からHRAFへスタッフを送って技術上の研修を受けるなどのことも計画されている。